



短歌

木村光子
小西久二郎 選

特選

糖分のとりすぎ注意前置きに
大福餅を持ちて娘の来る

堀町河分武士

(評) 糖分のとりすぎに注意するのよと前もって言いながら、大福餅を娘が持つて来てくれた。親を思う娘の心が出ていてあたたかい。そして、その娘の心が何ものにもまして親には嬉しい。

特選

春耕を待つ田に陽炎百馬力の
わが家のトラクターもう目覚めるる

野洲市 中道節子

(評) 「百馬力のトラクター」この具体が一首の核。農業者の心が、初句の「ときめき」、終句の「目覚めある」に如実。日本農業に真正面に対峙合う期待感が言外に実直に詠まれている。

特選

カラフルなバーゲンに疲れ片隅の
久留米餅に亡母なつかしむ

長浜市 木村諄子

(評) 色あざやかな掘出物の人たちに疲れはて、片隅にあつた久留米餅を見てむかし着ていた亡き母を思い出し、なつかしく思っている。バーゲンが母恋の作品になって何よりである。

入選

消去せしメールのなかに本当は
残したき文あり霧の朝

長曾根南町 日比野美鈴

(評) メールを一気に消去した時の感慨であろうか。影像メディアに寄りかかる現代人ならではの心揺らぎの作品である。五句の句割れは読み難く一考を要するかと。

入選

道らしき道の消えたる土倉の
鉦山跡までをみこし草踏む

長浜市 山田静子

(評) かつて、村を興した土倉鉦山へ祭礼の御輿が渡御をした日の、作者の感慨。塵鉦になつてはいるが、「草踏み」進む光景が、時代の星霜を語る歌である。

入選

「暇さうに歌かきるる」と誇る声
聞えぬ振りする歳晩の夜

長浜市 雨森正高

(評) いかにも暇そうに歌を書いているなあとそしる声がある。奥さんの声だろうが、年末で忙しいのによくもまあという。故に聞こえないふりをするしかない。歌に懸命なさまが出ている。

入選

年はじめ「喝」の一字を大書する
人様よりも我にいつかつ

米原市 吉川眞澄

(評) 書道を極めること自体、「道」であり、一生の道である。題材は「喝」、試筆の心がにじむ。しかし、「人様よりも」が説明になり、一步踏み出した感、惜しまれる。

入
選

くじゅうなな
九十七歳の母の口元拭いくるる

男孫の指の長く美し

日夏町 寺村 享子

(評) 九十七歳の母の口元、何か食べて汚れているのだろう。それを拭いてくれる男孫の指は長くて美しい。いやと言わずに拭いている指が長くて美しいには、その心の美しさも伝わってくる。

入
選

山裾の熊当番の始まりを

告ぐるメールの届く霜月

小野 町 小野 和子

(評) 山国日本の山の生きものたちとの宿命とも言える歌材。「熊当番」という名称、「メール」の用語等からして、現代の課題であり、山の保全と人間の苦渋を問う歌である。



佳
作

ぐづつける児をあやしつつ若き母

スマートホーンに指をはしらす

西今町 久永 朝子

佳
作

二十六卷「徳川家康」書架に古り

読み居し姑の年に近づく

本庄町 田口 敏子

佳
作

啄木鳥の穴を瘤とし豊かなる

芹川樺飽かず仰ぎぬ

芹橋二丁目 伊藤 正子

佳
作

車椅子誰が押すかと自問する

一人暮らしの我のこれから

米原市 島田 常喜

佳
作

枯れしかと見ゆる梅が枝一輪の

白き花咲く今日ひなまつり

出路町 滝 ふみゑ

佳作

津軽弁ダルマストーブに焼くするめ
吹く風荒む訛り飛びかう

鳥居本町 千葉 繁

佳作

野菊咲く草の根広場の片隅は
防空壕の掘られいしとう

本庄町 田口 洋子

佳作

手術終え窓より眺む青麥の
息吹もらいて全快の日を待つ

稲里町 勝見 政恵

佳作

さびれ行く古き宿場の面影を
番場の里の家並に見つ

大藪町 寺阪 美智子

佳作

足癒えて又ぞろ騒ぐ釣り心
川に海にと夢路さ迷う

芹橋二丁目 古池 陽彦

佳作

もう誰も履く事のなき^つ亡夫の靴
主^{あるじ}を装い玄関に置く

東近江市 田中 和子

佳作

離れ建つ大工職人息が合う
景気よい音周囲に届く

甲田町 平田 政江

佳作

母ふたりグルコサミンなど知らずして
膝の痛みをかこち逝きたり

長浜市 藤居 睦美

佳作

この年も作りくれたる「糰味噌」
友のぬくもり桶にみたしぬ

犬上郡甲良町 村岸 千鶴子

佳作

ふる里の湖に向って問いかけぬ
原発再稼動し命の水は

彦富町 池田 光雄

佳作

「似合つてる」君のひと言よみがへる
項にひらら百均スカーフ

馬場二丁目 清水はる

佳作

眼とぢ味はつてをり差し入れの
鰯大根は君の好物

栄町二丁目 長谷川 紀子

佳作

佐和山の城の瓦が出たといふ
彦根の城は桜満開

地藏町 佐古 徳子

佳作

八十路の夫包丁捌きも一歩ずつ
板に付く手を黙して眺む

古沢町 野 洌 令子

佳作

下り坂速さを加ふ父母も
この体感を受けとめ来しか

犬上郡甲良町 上 田 八重子

佳作

買うさえも憚るほどの小蜆の
朝までのいのち古釘いれぬ

長浜市 近藤 甚一郎

佳作

ニシンナス昔日の味届けたり
卒寿の母はうましうましと

平田町 谷 澤 正己

佳作

孤独てふ負けず嫌ひを背なにみせ
喉どに降すにがき冷や酒

長浜市 樋口 満智子

佳作

スライサーを使へと息子の勧むるに
胡瓜を刻むリズム楽しも

平田町 小堀 由起

佳作

あたたかき目覚めに気付く誕生日
胎児の形にしばしまどろむ

高宮町 細田 恵貢子

佳
作

争いて妻の沈黙融けぬまま
軒のつららの融けるを眺む

大藪町 外村輝夫

佳
作

この年の花見は車窓で済まさんと
缶コーヒー買う駅のホームに

米原市 成宮建男

佳
作

手術後に五年は生きむと思ひつつ
買ひし五年日記四年目を終ふ

大藪町 岩倉喜代子

佳
作

よろよると吊り橋渡る心地して
患ひ長き夫と歩みぬ

古沢町 大橋しず

佳
作

見付けたり言葉失せたる夫の声
古きテープにうたう青春歌

日夏町 石原不二子

佳
作

緊張の暫し間を置き息繋ぐ
石州和紙に滲み委ねて

稲里町 野瀬善一



《総評》

今年度の応募総数、二百二十四首には、家族愛、生活実感に根差す歌や、新鮮な視座の歌などの一群と平穩、安泰、無風の気安さの歌などの混在を実感いたしました。

よく引用される例に、短歌一首の完成はわが子を自立させるに似ると言うことがあります。作者からの口添えや助けが無くても、万人に伝わる力は確かか、用語用法は大丈夫か、既成の概念や在り来りに埋まり込んでいないか、類型は無いか。そして核心である「私の真善美」が根を張っているか等等です。

短歌は小さい器ながら、意志も資質も感動も丸ごと表白にするに相応しい文学です。「従来そのまま結構」からの脱却、「安住の胡坐」からの優雅な飛躍も、自らへの拍車も大切です。

感度の良いアンテナを掲げ、熱い詩魂を懐に、明日への一步を踏み出して下さい。

木村光子

十五首の作品依頼があつて、どうしても彦根城のさくらを詠みたく思い、カメラを持って花のさかりに二回出かけた。十五首を発表するには二十五首位作って自選する必要がある。中堀のさくらとしたりだれ柳をふり出しに、いろは松、護国神社の直弼歌碑、埋木舎、大老像、二季咲桜、ひこにゃん、白鳥と黒鳥、天守閣、お浜御殿、西の丸三重櫓、大手門橋など詠みたい素材は多い。それらをカメラに収めたりして、数日後何とか二十五首出来た。それを再三見直してようやく十五首まとめることが出来た。なぜ長々と申しあげたかという点、人間その気になれば出来るということである。私はこの市民文芸について応募作が三首であつても、せめて十首位は作る事である。努力しか方法はない。その点全般にまだ努力不足の感がする。又、もう少し文学、芸術という意識をもつて作歌にのぞんでほしいものである。

小西久二郎

選者詠

生れたての比良の緑風満杯の
リュックに君の戻り来さうな

木村光子

いく度も文子を訪ひしお浜御殿
今ひそとして猫の影もなし

小西久二郎

